生き方を問う授業：教養教育の可能性を探る
～立教大学全カリ総合Ｂ科目～

日時：2006 年 12 月 16 日（土）13：30～15：30

場所：池袋キャンパス 8202 教室

事例報告：

1．学生部提案科目「対人コミュニケーション」

福原　久美（学生相談所カウンセラー）、佐藤　一宏　（学生部学生生活課長）、

小林　潤（理学部生命理学科１年）

2．キャリアセンター提案科目「仕事と人生」

井上　雅雄（経済学部教授）、加藤　敏子（キャリアセンター事務部長）、

菊地　真美（文学部文学科日本文学専修１年）

3．チャペル提案科目「信じること、生きること」

View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

brought to you by CORE

コメンテーター：白石　典義（経営学部長）

司会：鈴木　秀一（全学共通カリキュラム運営委員、経営学部教授）

○司会　定刻になりましたのでそろそろ始めさせていただきます。司会を務めさせていただきます経営学部・全学共通カリキュラム運営委員の鈴木と申します。よろしくお願いいたします。

1997 年から始まりました全学共通カリキュラムも 10 年たち、このようなシンポジウムができまして、立教の一員として大変うれしく思う次第です。本日は一緒に有意義な時間を過ごさせていただきたいと思います。

まず最初に、全学共通カリキュラム運営センター部長の山本先生からご挨拶をお願いいたします。

○山本　山本です。皆さんのお手元に全カリのパンフレットがございます。一番最後のページに、2005 年度文部科学省特色ある大学教育支援プログラムへの採択について記載がありますが、その第１回目として昨年は自校教育についてのシンポジウムを開催しました。そして今回は２回目で、大学教育開発・支援センターとの共催で、「生き方を問う授業」というタイトルでシンポジウムを開催する運びとなりました。

この立教科目の特徴についてご説明します。立教科目は建学の精神を具体的な正課科目として学生に提供していく試みとして、2001 年に全学共通カリキュラム総合Ａの賜物として創設され、今年 6 年目になりました。最初は大学、都市、人権、宗教という４つのテーマでしたが、2006 年度からさらに、環境、いのち、平和、ウエルネスという４つのテーマを合

わせて８つのテーマとなり、合計で約60コマ展開しております。学生諸君に建学の精神を学ぶことを通して、自分の生活を豊かにする、あるいは自分の生き方についてを考えてもらおうという試みです。

さらに総合Ｂという科目群が全カリの中にあり、８つのテーマと非常に密接に関係が深いものにしてあります。各学部や全学共通カリキュラム運営センターの各教育研究室のみならず、学内の研究所や事務部局からも科目についての企画提案をすることができる仕組みになっています。

本日は、その中からいくつかの科目について実際に担当されておられる方、あるいは受講しておられる方に来ていただいて率直なことをしゃべっていただいて、みなさんと一緒に考えていきたいと思っています。どうぞゆっくり楽しんでいってください。

○司会　それではさっそく事例報告に入ってまいりたいと思います。まずそれぞれ30分ぐらいで三つのチームに発表していただきます。

鈴木　秀一（司会）

最初は学生部提案の「対人コミュニケーション」の報告をさせていただきます。

○佐藤　学生部の「対人コミュニケーション」の報告をさせていただきます。本日は用意したレジュメに沿って説明してまいりたいと思います。最初に私から概略の説明をおこないます。

学生部の「対人コミュニケーション」の授業ですが、今年から実施された新しい授業です。夏休みに入った直後の８月２日から５日まで、４日間の集中講義形式でおこなわれました。

最初にこの授業のねらいを簡単に説明させていただきたいと思います。レジュメには、以下の三つの柱が書いてあります。①コミュニケーションの意義や重要性などを人間関係論の観点から学ぶ、②家族、友人などとの周囲の日常的なコミュニケーションのあり方を見直す、③グループワークなどの実習を通して実際にコミュニケーションのあり方をふりかえり、コミュニケーション能力を向上するための方法を学ぶというような目的のもとに計画されました。

これらのねらいの大前提になるものとして、次のような考え方に基づきながら、スタッフはこの授業を組み立てました。それは、「さまざまな価値観があり、さまざまなものの見方があること」。そして、「いろいろな人がいて、いろいろな学生生活があってよい」ということです。学生たちにはそのことを頭の中だけで理解するのではなく、心とからだを通して実感してほしいと願っています。それを実感することで、お互いの違いを認識し、その違いに橋をかけ、お互いが理解しあうためのツールがコミュニケーションであると思えるようになり、主体的かつ有意義な学生生活を送ることができる力になっていくと考えています。このような考え方に基づきながら、立教大学の学生部はさまざまな課外教育プログラムを実施しています。

次に「対人コミュニケーション」の授業の実施の背景について説明したいと思います。

立教大学学生部は、伝統的に全人教育、リベラルアーツの考え方に基づき、学生の自立と成長を支援するさまざまな課外教育プログラムを展開してきました。2002年度からは、より多くの学生支援を目指し、正課授業の全カリ総合Ｂに「自己理解、他者理解」という科目を設定し、

現在まで５年間実施してきております。この授業は受講学生が 150 人前後おりまして、どうしても講義形式中心にならざるを得ませんでした。

一方学生部では、ここ数年間、課外教育プログラムとして対人コミュニケーションの大切な要素を体験的に学ぶことができるグループワーク「クリエイティブコミュニケーション」を年に２回ほど実施し、毎回 20 名前後の学生が参加していました。週１回２時間半のグループワークを５週連続で実施するわけですが、最終回の最後のふりかえりで何人もの学生から「このような体験から具体的に学ぶことができる授業をぜひ設けてほしい」という発言がありました。学生たちのそうした発言に後押しされて実習形式中心の授業が誕生することになったのです。

学生の参加動機について簡単に説明します。最も多かったのが「コミュニケーション能力を向上させたい」「興味や関心がある」もしくは「苦手意識がある」といったものでした。のべ 45 人ほどおりました。この他に「夏季集中講義に興味や関心がある」さらには「４日間で２単位もらえるのだから、ちょっとお得じゃないか」というような理由がありました。

次に「体験学習」の説明を簡単に行います。「体験学習」とは実習を通じて体験したことをベースにする学習のことです。特に、人間の行動領域について学習効果を最大限に発揮することができるといわれています。体験しながら体得していきますので、学んだことを実感して日常生活の中に活かしていきやすいと思います。日常生活の中ではコミュニケーションの失敗を恐れて萎縮したり、チャレンジすることをためらいがちになりますが、体験学習の授業では、どこがよかったのか、うまくいかなかったのはどうしてなのかなどと具体的に学生同士がお互いにふりかえる時間を必ず設定するため、失敗から学び、次につなげていけるような仕組みとなっています。まず実際に体験してみて、個人でふりかえります。個人でふりかえったものをグループ６～７人のメンバーで、お互いに指摘し、分析しあうことによって、個人の気づきや学びが広がったり深まったりします。そこから次にこうしてみよう、ああしてみようとチャレンジをすることによって、それが自分の身になっていくというか、成長していくというプロセスにつながっています。これが「体験学習の学びの循環過程」です。

プログラムの概要を説明します。８月２日から５日、平日は９時から５時まで、土曜日は 12 時半までプログラムの一覧表のとおりに実施されました。まず、最初に実習を行って、その後に個人でふりかえり、グループでわかちあいをした後にスタッフがミニ講義をおこなうという流れになっております。

次はスタッフの紹介です。この授業は学生部提案授業ですが、コーディネーターをコミュニティ福祉学部の福山先生にお願いし、その他学生部・学生相談所の職員・カウンセラーなどでグループワークを担当できる教職員がスタッフとなり企画立案をしました。４日間、チームティーチング制を取り入れながら行いました。大体のスケジュールは事前に考えてはおりますが、今回は授業終了後に夕方から２時間程度スタッフミーティングを行い、そこでその日の学生状況を踏まえながら、最も学生たちに適したプログラムを実施するために、実習の内容を変更したり、プログラムの順番を入れ替えたりすることも行いました。

以下、４日間の流れを簡単に説明いたします。プログラムをスタートする際、最初に集まりました時に、普通自己紹介から始まりますけども、今回は自己紹介の前に、個人個人の課題と目標の設定を

絵によって表現してもらいました。さまざまなものが表現されましたが、そこにはこの授業に参加するそれぞれの思いが描かれておりました。

１日目は、お互いが知り合うためのアイスブレーキングが終わった後に、体験学習とはどういうものなのかということを、まず最初に体験してもらうための簡単なグループワークを行いました。

初日にいろいろな実習を行いましたが、ほとんどが知らない者同士でしたから、かなり疲れたようです。そこで２日目の午前中では、午後に予定していたプログラムを持ってきまして、屋外に出て、言葉によらないノンバーバルコミュニケーションの実習や、からだを使ったり、自分の感性を研ぎ澄ましましょう、というプログラムを行いました。２日目の午後は、コミュニケーションの基本的な要素である「話す・聴く・観る」ということについて３人１組になって話し合いを行うことで自分の特徴に気づくグループワークやコンセンサスによる意思決定、協力の過程を分析し、検証するグループワークを楽しみながら行いました。

３日目の午前中は自己表現、自己主張ということがテーマになっておりまして、頼むとか断るといった、ロールプレイの実習を行いました。役割を与えられて、実際にそれを演じてみます。例えば、子供が親にお小遣いを１万円に上げてくれと頼むという設定で、親と子どもがどういう気持ちになっていくのかという体験をしてみるプログラムでした。３日目の午後は、無言で図形を組み立てるという実習で、そして言葉に頼らずに、相手の動きですとか、感情、そして自分の思いを伝えるなど、そうしたさまざまなサインや気持ちの動きに意識を傾けてみようという実習を行いました。かなりみんな苦労しながらやっておりました。

４日目は授業で学んだこと、気づいたことをレポートにまとめたり、全員で感想を述べ合うといったプログラムを行い、授業は終了いたしました。初日緊張していた学生たちもすっかり打ち解けあい、一人ひとりがいきいきとした表情で最後のわかちあいが行われました。

次に、４日間参加した学生の大きな意見について大体三つぐらいにまとめてみました。

「あいづちをうったり、相手が思っていることを察してあげることで、相手には聴いていることが伝わるということがわかった」「自分の意見とはまったく違っているのに、それでも真剣に他の人の意見を聞いている人を見て大きなショックを受けた。その人は私のことを認めてくれたし、私はその人自身の意見も大切にしていた」「自分と他人と本当に別の人なのだと感じた。お互いに別だからこそ相手に自分の気持ちを分かりやすく明確に伝え、自分の考えを納得して受け入れてもらえるように努力することが大切だと気付いた」といったことを多くの学生が感じていたようです。42 名の学生が参加しましたが、多かった意見を少しまとめてみました。

学生の感想を見ていきますと、さまざまな考えがあることを実感したり、コミュニケーションの大切な要素を４日間の体験の中から具体的に学んでいることがわかります。それから、自分はコミュニケーションが苦手だと思い込んで

学生部「対人コミュニケーション」

いた学生が何度か体験を重ねていくうちに、トレーニングをすればコミュニケーション能力が上達するものなのだと実感している学生が多かったのも事実です。このような学生の声から、この授業のねらいが学生に伝わっていたのではないかと感じています。

かけ足で説明いたしましたが、次は学生相談所の福原カウンセラーにマイクをお渡しして、最近の学生の状況の説明と課外教育プログラムで実施していたものを正課の授業に取り入れた必然性について説明していただきます。

○福原　福原でございます。引き続きまして、私は最近の学生状況につきまして簡単にご説明した後で、小林君にこの授業についてどのような感想を持たれたかということについてお聞きしたいと思っています。

私は新座学生相談所におりまして、いろいろな学生さんの相談を受けています。昔から少しずつその傾向は見られたのでしょうが、最近はとみに人とのコミュニケーションに苦手意識を持っている学生が増えてきているなということを強く感じております。例えば友だちができないということの悩みですとか、特によく知っている人か、あるいは全然知らない人はいいのですけれども、顔見知り程度の関係が苦手であるとか。また相談に来る方は、過去においていろいろないじめの問題ですとか、いろいろな人間関係、対人関係で、いろいろと悩んだ経験があるという方がいらっしゃいます。このようなことが特に言われてきているという状況があるというのは、その要因としてコミュニケーションの経験の不足があるのではないかというふうに考えられます。

まず、それはどういうことかといいますと、昔、私が子ども時代、何十年も前ですけれども、そのころは近所に子どもコミュニティというものがあったのです。空き地があって、そこでいろいろな年代のお兄ちゃんもいれば妹分みたいな者もいるし、いろいろな子どもたちが一緒になって遊ぶという場がありました。子どもコミュニティと私が名付けましたけれども、そういうものがなくなり、年齢の異なる子ども同士が遊びを通して実践的にコミュニケーションの練習をする機会が減少しているという状況があります。

その次に、核家族化により異なる世代とのかかわりが減少し、横割りの同世代に限定された付き合いにより、さまざまな価値観や生き方を学ぶ機会が減少しているのではないか。そういうことが考えられます。

従来でしたら、地域や家族の中で自然に身に付いてきていた対人コミュニケーションのあり方が、現代の社会状況の中では非常に困難になってきているのではないかと考えられます。思春期から青年期にかけては、つまずいたりぶつかり合ったり葛藤したりなどの体験を通して試行錯誤しながらコミュニケーションを学んでいくものであるのですけれど、また、併せて自分とは何か、どのように生きていくのかなどについて考えていくものですけれども、学生になるまでそのような経験が希薄な場合、コミュニケーション体験による失敗を恐れ、ちょっとうまくいかなくても、苦手意識を持ってしまうという結果となっているのではないかと考えられています。

福原　久美

このように、大学に来るまでにそういう経験が少ない方が多くなってきてい

ると私には見えております。このようなコミュニケーション苦手意識というのは、対人関係の問題のみならず大学生活全般に影響していると考えられています。例えば大学生活にコミットできず低単位取得となっている学生の中で、対人コミュニケーションの問題が契機になっている場合が多くの割合を占めております。

それでは、このような状況の中で、この授業が目指すのはどのようなものかというということを考えてみました。従来立教大学の伝統的なことなのですけれども、学生部や学生相談所が中心となりまして、さまざまな課外教育プログラムの中で対人コミュニケーションに関するプログラムを行ってきたのですが、それだけでは足りないのではないか、もっと多くの学生さんに対して必要なのではないかということがここ数年言われてきております。このコミュニケーションのあり方を、今までは自然に身に付いていたものですけれども、安全で守られた空間で体験的に学ぶ必要性があるのではないかと。うまくいかなかったことや失敗が上達につながることを学んでいく場が必要であると。随時、フィードバックによる自己理解、他者理解、そしてさまざまな価値観、生き方があっていいのだという認識が生まれるのではないかと考えております。

また、体験学習で学んだことを日常生活の中に生かしていくことにより、より有意義な大学生活を送れるようになれるのではないかと考えております。

次にここが今日のメインですけれども、今日来ていただきました理学部生命理学科１年生の小林潤君に、私からインタビューの形でこの授業を受けてどのような感想を持たれたかということについてお聞きしたいと思います。

まずは参加してみようと思った動機について聞かせてください。

○小林　理学部生命理学科１年の小林です。私は１年生なのですが、やはり大学生活を楽しく過ごしていくには友人ができないと困ると思っていました。その時に、今日お配りされている資料の中にある『立教チャレンジ』という小冊子が新入生のガイダンス資料にもありました。その中にこの「対人コミュニケーション」という授業が載っていて、コミュニケーション能力の向上に役立つのではないかと思い、参加させていただきました。

○福原　それでは次に質問したいと思いますけれども、印象に残っている実習というのはどんなものでしたでしょうか。

○小林　パワーポイントでもちょっと紹介がありましたが、ハナブサ・フィギュアーズといって、グループ５、６人ぐらいで同じ図形をつくるというゲームでした。この実習が言葉を使ってはいけないというルールなので、特殊な状況でコミュニケーションをとらなければいけないのです。ちょうど夏休みの時に私がアルバイトをしていまして、それが単純作業なものであまり言葉を使わずにやる仕事だったのですが、この実習を通して、そういう言葉を使わない中にもコミュニケーションをとるという状況が普段の生活にもあるのだなということを改めて実感しました。

小林 潤さん

○福原　実際この授業というか実習をやってみて、普段のアルバイトを振り返って見られたと

いうことですね。
○小林　はい、そうです。
○福原　なるほど、そういうことですね。次にお聞きしますけれども、体験学習という実習を中心とする学び方について感じたことはありますか。
○小林　普段の授業が本当に講義形式が多く、先生の言っていることを受動的に受けるという感じでしたので、自分が実際に動かなければ何も得ることができないという体験授業は、最初は戸惑いもあったのですが、あとあとふりかえってみれば、何かをやった、何かを達成したという感じがあったので、とてもよかったと思います。
○福原　能動的になったというか、ならないとできないという感じで。
○小林　そうですね。受動的ではできません。
○福原　一方通行で受け入れるのではなくて、自分が動かないといけない。
○小林　はい。
○福原　あと、スタッフに関してはどうでしたか。
○小林　スタッフの方も、普段であれば説明したり解説したりする立場にありますから、本来であれば教える者と教えられる者という上下関係で一方的に答えを教わるという感じなのですが、この体験学習の場合は、学生たちがその中で学んできたことに対してサポートをする立場をとっていただいたと感じています。スタッフの方ともとても接しやすかったですし、またコミュニケーションに対しての話もしやすかったです。
○福原　よかったですね。
　では次に、4日間を通して学んだこと、感じたことは何でしょうか。そしてそれは、今のあなたの生活に対してどのような影響を与えているでしょうか。
○小林　この対人コミュニケーションの講義を聴いて実感したのは、コミュニケーション能力というのは、もともと先天的なセンスがあるとかしゃべることがうまいということでコミュニケーションがとれるということではなくて、実際に体験して、コミュニケーションを実際にとってみることで、苦手だと思っている人でも、その能力を向上させることができるのだなということをとても実感できました。
　それで、コミュニケーションをとるというのは、やはり生活していくうえでとても重要なことだと思います。生活には欠かせないツールだと思うのですが、そのことが実感できたということで、今の私の生活につながっていると思います。
○福原　今の生活、例えばどんなことで。今までうまくいかなかったけど、これを体験してというのはありますか。
○小林　大学に入ってから、今まで中学や高校では自分と同じ年齢の人たちと話すということがほとんどだったのですが、大学に入ってからはいろいろな年代の人と話すようになった時に、今までちょっと敬遠してしまったりとか、うまくしゃべれなかったとかということがあったと思います。しかし、このような授業を通してコミュニケーションを見直してみた時に、そういう自分が苦手だなと思っている人ともコミュニケーションをとっていくことで向上させる、ということが大事なのだというのが、今の生活でつながっている事柄です。
○福原　そういう経験を通して自分の世界がちょっと広がったということですか。
○小林　はい、そうですね。
○福原　最後になりますが、この「生き方を問う授業」という大きなテーマなのですけれども、そういう観点からこの授業について思うことはありますか。
○小林　やはりコミュニケーションというのは、社会生活を送っていく上で絶対に必要不可欠なツールだと思うのです。そういうものを大学生の時点で、社

会に出る一歩前の段階で、このように学ぶ機会が実際、具体的にあるということは、とても意義があることだと思います。

○福原　けっこう参加した人たちがやる気があったのではないでしょうかね。

○小林　そうですね。こういう体験型の授業があるということで、やはり講義を受けようという方が、皆さんモチベーションが高い方々だったので、たしかに最初からとても話しやすいという人が多かったです。

○福原　ありがとうございます。それでは最後に、立教大学が大切にしてきたことについてもう一度佐藤さんにお話しいただければと思います。

○佐藤　立教大学は、他大学に比べて学生部やチャプレン室などのさまざまな部局が学生支援向けに多様な課外教育プログラムを数多く実施していることが特徴であると言えます。その中で大切にしてきたこと、こだわりとして守り続けてきたことを少しお話したいと思います。

まず、これは最初に出てきましたが、「さまざまな人間がいて、さまざまな生き方があってよい」ということです。これは、一般的によく言われていることですが、こうしたことを実感することは実はなかなか難しいのではないかと思っています。学生部としては、より多くの学生が実感できるような、さまざまな機会を設定していきたいと思っています。

次に、「関係性の中からお互いが学び合うことで自立した学生を育む」ということです。一方通行ではなく双方通行の中から学び合うということです。最近、自立した学生、主体的な学生を育てるということはどの大学も目標に掲げていますが、立教大学は関係性の中からお互いが具体的に学び合うことを大事にしています。学生部やチャペルのプログラムが、さまざまな社会に生きている人たちと出会う中から、自分自身の生き方やあり様を考えるフィールドワークやキャンプなどが多いのも、関係性の中から学ぶという立教の特徴が表れているということができます。

最後に、「他者の思い・痛みを受けとめることのできる人間を育む」ということです。先の二つを実感できるようになると、自分自身がどのように生きていくかという視点ばかりではなく、他者の思いや痛みを受けとめながら、自分自身の生き方を考えていくということができるようになると思います。そのことが、他者とともに生きる、真の「共生」ということを意味しているのだと思います。このことはまさに立教大学の建学の精神に連なる生き方であり、現代社会に生きる私たちに必要とされている大切な視点ではないかと感じています。

これからも、こうした大切な考え方を受け継ぎながら、学生たちの状況に目を向け、さまざまな授業、課外教育プログラムを実践、展開していきたいと思っております。

以上で、学生部からの報告を終わります。

○司会　どうもありがとうございました。

今、対人コミュニケーションということで学生部から報告させていただきました。立教生はコミュニケーション能力があると企業の方からつねづねうかがっておりますけれども、こういう授業を通じてますます立教生のよさが伸びていくのはないかと期待される次第です。

それでは、次のプログラムに移らせていただきます。「生き方を問う授業」ということで、教養教育の可能性を探る次のプログラムとしてみなさまにご紹介いたしますのは、キャリアセンター提案の「仕事と人生」でございます。

○加藤　キャリアセンターの加藤と申します。よろしくお願いいたします。

レジュメを用意させていただきまし

た。なぜこの授業を設定したかですが、その説明の前に、立教としてどのように「就職」を位置づけ学生に発信しているかをお話したほうがよいと思いますので、レジュメの最後のⅣをご覧ください。キャリアセンターからのメッセージという形で、常日ごろ、就職を迎えた学生、それ以前の時期のもそうですが、再三再四学生に伝えているメッセージです。

まずは、学生生活、つまり授業、サークル活動、アルバイトなど、正課・正課外の充実、そのプロセスの先に就職活動があるだけだと。特別に就職活動というものが何かイベント的にあるものではないのだということを伝えているのですが、就職時を迎えてしまったらそれどころではない、の繰り返しになっていました。第二に、最近キャリアという言葉が非常に流布されていますが、キャリアを考える、分かりやすく言うと、つまりこの先自分らしくどう生きていくかということを就職前にじっくりと考えることであり、それはとても大切なことなのだと常々キャリアセンターが事ある毎に学生に伝えています。

そして、実際の活動に際しては、企業等に選ばれるのではなく、この私が企業なりを選ぶ。「私が選ぶ」ことが就職活動という活動なのだ。そして、日常的にはhow toという考えではなく、常にWhy、なぜ。なぜそうなんだろう、なぜ、なぜと意識しながら、常に問題意識を持って

キャリアセンター「仕事と人生」

学生生活を送りなさいということを学生たちには伝えていましたが、それがなかなか学生へ伝えられないもどかしさの繰り返しでした。

また私自身のことでいいますと、1980年代の高度成長期の約 10 年間弱を就職部におり、バブル採用も体験し、その直後相談所に異動になりました。

相談所での９年間がその後また就職部に戻った私の業務に大きな影響を与えたことはいうまでもありません。学生の成長発達実態を知らずして就職相談業務は困難な時代に入ったからです。その頃から丁度、親子関係問題とか対人関係、社会病理に鋭くセンサーが働く学生が表現して来談するようになりました。特に対人コミュニケーションで苦労する学生が増えてきました。若者が非常に生きづらい状況の中での支援業務なのだという認識が重要だと思いました。

キャリアセンターのメッセージや学生の状況をお話しましたが、そういう背景のなかで、レジュメⅠの提案趣旨（なぜ授業を設定したか）に至ったわけです。３点あります。１つ目が、先ほどの繰り返しになりますが、３年次の就職時では、どう生きるかを考えるには遅い。考える時間がない。学生はどうしたいかではなく、何になるか、どこに就職したいかにどうしても走ってしまう。就社としてのhow toに走ってしまう。これは学生のせいではなく、小さな時からそういう教育システムと言いましょうか、そういう状況の中で走り続けてきているから、その延長線上になるのです。

２番目に、キャリアセンターは正課外でいろいろな進路プログラムを打つのですが、正課外プログラムでは意識の高い学生しか集まってこない。むしろ集まらない学生たちに何とか伝えたい。これが第２点です。

３番目は、授業でじっくりと生き方を考えさせたいという念願を従来からず

っとあたためていたということです。常にどう生きるかを考えさせられてきたのが女子の就職です。1986年に「男女雇用機会均等法」が施行され、最初に就職活動をする時点で「あなたは一般職のコースにするの、それとも総合職で行くの」というような、非常に強いられた状況の中で女子学生はスタートとしていくわけです。ですので、女子学生は、男子学生と比べて前々からどう生きるかということを考えてきて、いや考えさせられたと言ったほうがいいでしょうか。そんな状況に置かれていました。

そういうなか、1986年均等法の1期の女子学生に就職活動を終わった時点で、「生き方をもっと授業の中でじっくり考えられるのがいいと思うか」というアンケートを取りましたら、当然ながら80パーセント以上の女子学生がイエスと答えました。それを十数年間あたためておりましたので、全カリのこのシステムができた時に、それ、という形で手を挙げました。しかし当時の部署の状況からは非常に無謀にみえて、本当に職員が授業を担えるのか、正課授業を職員が持つのはいかがなものかとか、いろいろな議論がありました。

その結果授業に踏み出すことに背中を押した大きな要因は、レジュメのⅡの人材要件の変化と学生意識の実態とのかい離ということでした。大学をとりまく社会、産業界の急激な変化を学生は気がつかないでいる。これではいけないという焦りにも近い気持ちを部署として感じていました。一言でいいますと産業界の人材の高度化です。学生時代に何をしてきたかを根ほり葉ほり書かされ、聞かれる。学生時代に力をつけたことを質問される。特に学びのプロセスを聞かれたりと、従来の採用とは明らかに異なってきました。その結果、苦戦する学生が多くなってきました。

学生の方はと言いますと、就職はとにかく不安、暗い、あまり考えたくない。資格を取って武装していくことが就職に勝つことだというような考え方も強くありますし、「企業偏差値ってあるんですよね」という学生からの問いにはびっくりさせられました。また、他者評価である人気企業ランキングに右往左往するなど、産業界の変化と学生の意識があまりにもかけ離れている。何とかその距離を縮められないか、就職のためではなく、社会と学生を早期に繋げて、生きること、働くことを考えさせたいという思いでした。

レジュメのⅢでは、授業の結果、効果はどうなのかということを挙げてみました。毎年アンケートを読んでみて、私はやはり若者はすごいと思いましたね。若者が持つみずみずしさとか、きちんとした現実を伝えることによる気づきなど、さらにちょっと背中を押せば前向きな意思と力を発揮するということを、1年目のアンケートにして、もう思い知らされました。

「学生と社会をつなげる」と書いてありますが、いかに学生が社会とつながっていないのかということに、私たちが気づきました。現実に起こっていることをきちんと正課授業等も含めて大学は学生に伝えているのだろうか、という疑問を非常に持ちました。大学という学問の世界はそういうところではないよとか、あまりにも厳しい現実を知らせないほうがいいのではないかとか、小中高も同様に先送りして伝えないで、偏差値だけの一つの価値観で走らされて来た結果ですね。

学生たちは、厳しくともきちんと現実を伝えるとわかる。ネガティブにならないどころか、前向きになるということを私たちは実感しました。現実の社会、企業実態、法律等を知ることにより漠然とした不安が解消したと多くの学生が書いています。就職に対して「漠然とした

不安」という表現は今年度の特色でしたが、いかに知らないことが多かったかに気づき、その結果視野が広がる。

現実に企業内で働いて活躍しているベテランの管理職の女性の話を聴き、日本の企業にこういう女性がいるのだと驚き、“勇気と未来をもらいました”と書いている女子学生がいました。そして、働くということへの意識が変容するのです。ネガティブに思っていた就職の暗い感じが、ポジティブに変わる。「働くことが楽しみ」「早く社会に出てみたい」という言葉も出ていました。立ち止まって後ろを見て、振り返って、そこで、また未来の自分を描けるということ、これはキャリア開発の本質なのですが、そのことが、もうこの授業だけで起こっているといえます。

そして、これが一番重要なのですが、「そうか、特別なことをするわけではなくて、日々の学生生活を大切にして生きていくことなんだ」という気づきに授業を通して到達していることです。更にもう少し背中を押せたのが、これから「いろいろなことを経験したい」「いろいろな人に出逢ってみたい」という声が多かったことです。具体的に「インターンシップにチャレンジしたい」とまで書いているものもありました。

結果として私たちが分かったことは、大学生活の持ち時間がすごく大切だということです。１・２年生のアンケートと、３年生、４年生のアンケートが如実に違う。学生生活がまだいっぱいあるというのは、まだまだいっぱい自分に可能性があるのだ。だから、いろいろなことをやってみたいというのが１年生で、３年生になりますと、「この授業は１、２年生でやるべき授業だと思います。でも、後期から就職活動なのでラッキー」とか、「これを知ると知らないとでは全然違う」ということが書かれていたり、４年生の場合には、「もしこの授業を受けていたら、自分はこの内定企業を受けなかったかもしれない。もっと生き方を変えたかもしれない。進路を変えたかもしれない」ということが書いてありました。やはり早期に伝えることの重要性を学生からもらったことは大きなことです。

そろそろ時間なのですが、この授業はマスコミからの取材が多く、日本におけるキャリア教育の経緯を知るには格好の資料ですので、レジュメの後ろに記事のコピーをつけました。ざっと説明します。就職率最低の 1999 年の記事は「目的意識がずれる学生。職業観育成、新たな模索」とあり、あの頃はキャリアという言葉すらなかった時ですね。次のページの、授業スタートの 2000 年には「大学で就職の授業」という見出しで、大学でそういうことまで、という、ちょっと揶揄したニュアンスがありました。2003 年の記事は、『神戸新聞』なのですが若手の記者がわざわざ取材に来てくれました。「人生を考える授業である。夢や目標に気付けば彼らは動き出せる」という、私たちの意図することを的確に表現してくれていました。

次のページは、『朝日新聞』の「就職力」というシリーズもので、現在でも続いているものですが、2004 年のこの立教大学の記事が第１回目だったのです。

記事のなかで「３年の秋になって初めて就職を考えるのではなく、時間がある１、２年生から生き方を考える支援をしていきたいという就職部の思いと学生のニーズが合致した」とありますよね。この記事を通して面白い出会いをしました。この記事を読んだある演劇青年から「ぜひ、話を聞きたい」という電話が突然入ってきました。その青年は「自分はすごく進路を悩んだ末、大学ではなく、やはりやりたい演劇のほうを選んだ、だけど、よくよく考えてみると、やはり勉強もしたい。この『生き方を考える授業』とはどういう授業なんですか」という反

応だったのです。その青年とは何回かやり取りもし、招待され、演劇を課員が観にいったりして交流も持ちました。他の方からも複数「生き方を考える」という言葉で反響があったことは、こちらの方が驚いたと同時に嬉しかったことでした。

そして、この授業は何よりも 2000 年の時にコーディネーターの教員をなんとか探さなければいけなかったのですが、その時ちょうどと言ってしまうと失礼なのですが、就職委員に労働経済学がご専門の井上先生がいらっしゃって、「学生のためなんです。是非先生お願いします」と強引にお願いし、拝み倒したことを覚えています。その後先生とやり取りをし、引き受けてくださって、早いものでもう７年目を迎えたということです。

では、先生お願いします。

○井上　加藤さんのお話がちょっと長くなりましたので、私のほうは簡潔にお話したいと思います。

今から７年前なのですが、私のところに、当時就職部の加藤さんがいらして、学生に対してキャリア教育と言いましょうか、当時キャリア教育などというような言葉はそれほど一般化しておりませんが、学生の職業意識を何とか高めるような授業ができないかという話が、私に持ちかけられました。その時就職部が構想した企画案がございまして、それを拝見したのですが、コンセプトと言いましょうか、どのような考え方でこの企画が練られたのかについてよくわからないところがありましたので、議論を重ねて、今日のようなスタイルの授業の科目構成としたわけです。

井上　雅雄

この講義をはじめた 2000 年という年は、バブル崩壊後の厳しい経済状況が 1997 年の金融危機でさらに一段深刻化して就職環境が一層厳しくなり、いわゆる就職の氷河期が学生諸君を襲っていた時期でありました。にもかかわらず、学生は苦労して就職した会社を３年ぐらいで辞めていくという、七五三と俗称されていますけれども、中卒が７割強、高卒は５割強、大学卒が３割ぐらいの割合で新卒者が最初の会社を３年以内に辞めていくという現象が出てまいりました。

他方、15 歳から 20 代前半までの失業率は、約４パーセント台の平均に対して 10 パーセント近くにもすでに上っておりました。これは要するに、働くということの意味が若者たちの中でかなり変容を来しているのではないか。それまでは自明であった、生きるということは何らかの職業に就いて働いて生きていくということにほかならないという、この自明の等式がどこかで揺らいでいるのではないか。あるいは崩れているのではないか。このことのあらわれが、今のような数値として表現されたのではないかと私は思いました。

当時はまた日本の企業がバブル崩壊のあと非常に激しい市場競争の只中にあって、かつての日本的経営に対する自信を喪失していた時期でした。それは、他方でアメリカが 1990 年代に入って経済の動きを市場に委ねるというやり方で政府の介入を少なくして、できるだけマーケットメカニズム、市場原理を働かせるという考え方に大きくシフトして不況を乗り切っていった時代だったものですから、そのアメリカ型の市場主義が日本にも波及し、これまでの長年にわたって日本企業の人事政策を特徴づけていた年功的な賃金や昇進のあり方、あ

るいは人材育成方式、これらが大きく揺らいだ時期でもありました。同時に、それは従業員が一定の期間で上げた業績そのものを短期的に評価するという、今日の表現で言えば「成果主義」が少しずつ日本企業に浸透しはじめた時期でもありました。

これは当然のことながら、学生を雇う企業の採用政策に大きな影響を与えていきました。より厳格に、より高い期待感・要求を持って学生を選別するという、特に当時よく語られたのは「即戦力」という言葉でした。仕事にすぐに役に立つような人材が欲しいというのが企業の採用政策の基本になりつつあったわけです。

しかしながら、ご承知のように大学というのは、いわゆる専門学校あるいは高専のようなかたちでの特殊な職業教育をおこなうものではありませんので、会社に入ってすぐに役に立つような知識やノウハウや情報は直ちには提供していないわけです。そこに即戦力が欲しいと言われても、大学としては無理な注文だということになるわけです。

改めて言うまでもないことですが、就職部というのは大学という知の集積体と、市場原理によって動いている企業との、いわばちょうどインターフェイスの関係にある、接点になっている大学の唯一の部署です。つまり、ある種の触覚として社会のそういう動向を最も早く感知し取り込むことができる部署ですが、この就職部が学生の採用への対応を通して困惑したのは、一方ではそういう企業の側の高いexpectationと要求水準があり、他方では大学が本来持っている、立教大学で言えばリベラルアーツのような教養教育を軸にしてプラス専門的な教育を供給するという大学の基本理念とが実は衝突するところがあるということです。

就職部からこの講座の開設を依頼された時に私が一番悩んだのは、実はこの二つの大きな狭間の中でどのようなことが可能なのかということでした。しかし、ともあれ学生の就職をめぐる不透明な状況の広がりというのは座視できないわけですので、私自身が持っている講義の展開をやや一般化した形で講義のプログラムをつくり、それに何度か修正を重ねながら学生諸君の仕事に対する意識と自覚を促そうと試みて、今日に至っているわけです。

生きるということは抽象的なものではなくて、やはり具体的に何らかの仕事に就き、そこで自らを賭して目標の達成に心弾ませながら日々を活性化していく、そのような強い、揺るぎのない生き方が一つのパターンとして、日本の社会を長い間律してきたわけですけれども、しかしそのこと、そういう生き方自体が揺らぎ、不透明になっている。これは大げさに言えば社会の危機の波頭ではないか、と私は思いました。

その観点から、お手元の資料の 15 ページに書かれているようなカリキュラムとして展開したわけです。私はこうした経緯で開設した授業ですので、学生諸君の生き方そのものを問うような授業構成はしておりませんでした。しかし、結果として、学生諸君はこの十数回の講義を通して、例えば「自分がどうやって生きていくかの、ある種の方向性のようなものはつかむことができた」というような感想がたくさん寄せられたことは、私にとっては望外の喜びでした。

講義の方針も、また私自身も、就職戦争といいますか、仕事に就くための壮絶な戦いをパスするためのノウハウを提供する授業ではないのだとして、講義を組み立ててきました。学生諸君が今をどのように生きるか。何に興味を持ち、どんな本を読み、どんな映画を見、どういう友だちと語らい、どういう教師と出会ってどういう話しをするか。そういうこ

とが総体として就職に向かっていく基盤を構成するのだというようなことを、結局は語り続けてきたわけです。

学生諸君の感想は、それを如実に示すものなのですけれども、例えば「学生として学問を学ぶことが究極の就職準備であるということも再確認することができた」という感想もありました。あるいは「『仕事と人生』を受講したことで、自分は本当に今何をすべきかを具体的に考えるようになった」という感想が寄せられました。これはコーディネーターとして私が考えていた、意図したところをはるかに超えた学生諸君の感受性の高さがこういう感想へと結実したのだと思います。

それでは、今日はその感想を、率直な批判も交えて菊地さんに語っていただきましょう。

○菊地　１年、文学部の菊地です。よろしくお願いいたします。

今日は幸いに、先生方が「自由にしゃべっていい」とおっしゃってくださったので、率直に言いたいと思います。

私はこの授業を受ける前は、職業に対して、先程も先生方がおっしゃっていたのですけれど、漠然とした思いというのが一番大きかったのです。まだ１年ですし、先のことだという思いが大きかったのです。実際にこの授業を受けてみてよかったことは、世界観が広がったということと、漠然としていたことが、きちんと自分の中で考えられる、処理できるようになったということです。

菊地　真美さん

先程加藤さんのお話で演劇青年の話がありましたが、例えば、将来こういう職業に就きたいとか、こういうふうになりたいなという憧れは誰しも持っていると思うのですね。でも、実際にそれに向けて何をしていいかわからないとか、実際にその職業になるとすると、どうせなれないだろうなという、ちょっと冷めているとは思うのですけれども、そういう自分も実際にはいると思うのです。自分がやりたい職業と、でも実際になれるかどうかわからない不安という両方があって、結局どうしたらいいのかわからないなかで授業を受けていました。

この授業のよかったところは、授業という形をとっているので、まったく自分が興味のない職種の話でも聞かなければいけない点で、実際に自分がこの授業を受けていなかったらまったく知らなかっただろうという話を聞けたということです。その職場の生の声といいますか、普通に生活していたら絶対聞けなかっただろうなというお話をたくさん聞けたのでためになったと思います。自分が知らない世界もあるのだなということがよくわかりましたし、お金だけで価値を決めてはいけないのだということをとても感じました。

ここでこの授業を受けたことによって私が影響を受けた具体的な例を挙げたいと思います。私は今までアルバイトの経験がなく、大学に入ってからサークルの先輩にアルバイトを二つ紹介されていました。私は中学校のころからずっとテニスをやっているのですが、一つはその自分がずっとやり続けていたテニスに関するアルバイト。もう一つは、まったく自分とは関係のない世界の職種のアルバイトでした。結局この授業を受け終わったあとからアルバイトを始めたのですけれども、今まで全然接していなかったほうのアルバイトをすることにしました。

もしこの授業を受けていなかったら、やりがいや人間として成長できるかなどということは考えずに時給だけでどちらのアルバイトをするか決めていたと思います。また、私はいま、こうやってシンポジウムで話しているのですけれど、もし、この「仕事と人生」という授業を受けていなかったら、このように人前に出て話すようなことはしなかったと思います。でもこの授業を受けてみて、自分の知らない世界があるということに気付き、もっといろいろな世界を知らなくてはいけないし、知りたいなと思うようになったのです。

学業やサークル、遊びも譲れない忙しい毎日のなかで、どうやって職業のことを考えていくのだろうと不安に思っていた１年生という早い時期に、この授業を受けることができて本当に幸運だったと思っています。

今、何をしたらいいかと言われたら、自分が自信を持って、これだけは学生時代に頑張ったということをやっていけばいいのだなと授業を通し学びました。

「生き方を問う」ということなのですけれど、実際にはまだ、よくわかりません。でも、時間をかけて考えていくきっかけになったので、よかったと思います。とにかくいまは、もっと新しいことや新しい人に出会って、自分を磨いていきたいと思います。

○司会　どうもありがとうございました。

今、菊地さんが「生き方については難しい」というようなことをおっしゃっていましたけれども、どう生きていくか、それはなかなか難しいことで、私も同感です。井上先生がおっしゃっていたように、生きるということが、職業生活に就いて働いて、それで日々を活性化していくのだという、どうもそういう方程式は通用しなくなっているということは日々思います。この７年目の「仕事と人生」という科目は、今や学生たちの中では伝説的な科目の一つになっておりまして、非常に影響力が大きい科目になりました。

次にご紹介させていただきますチャペル提案の「信じること、生きること」は今年で３年目になります。

それでは、よろしくお願いいたします。

○香山　それではチャペルが提案をしました、全カリ総合Ｂの「信じること、生きること」。このシンポジウムのタイトルの「生き方を問う授業」というのはたいへん大きいのですけれども、なるべく具体的にどういうことをやったかということを中心に報告をさせていただきたいと思います。

そのことを申しあげます前に、まずこういう授業ができた、その提案の背景にあることに関して西原先生からお話をいただきます。

○西原　こんにちは。文学部のキリスト教学科の西原廉太です。よろしくお願いいたします。

この「信じること、生きること」は先ほどご紹介ありましたように３年目ということなのですが、実は私は、この総合Ｂのコーディネートをさせていただいて６年になります。今年は研究休暇をいただいているのでコーディネーターはできなかったのですが、実質、連続した総合Ｂをやってきたと思っております。

この「信じること、生きること」が３年前に始まる前に、続けて４年間、総合Ｂのコーディネーターをさせていただいたのですが、それは科目名としましては「日本社会と民族差別－多民族多文化共生社会の意味」というタイトルでした。それが前史的なものなのですが、その総合Ｂがある意味で基盤になって、この「信じること、生きること」が誕生したということも言えますし、また同時に、現在も「多民族・多文化共生社会の意味」

という総合Ｂで得られたことを基盤に続けられていると思っておりますので、まず以前に行っておりましたこの「共生社会の意味」という総合Ｂの報告をさせていただきたいと思います。

この総合Ｂは、担当者は私と、それからこちらにおられる香山チャプレンと、初年度は金性済（キムソンジェ）さんという、在日大韓キリスト教会の現場の牧師さんで、同時に旧約聖書の専門の神学者でもある方を非常勤講師としてお迎えして３人で担当しました。総合Ｂは複数の教員で行えるというところが非常に魅力的でございまして、いろいろな準備も３人で考えてやりました。

内容を簡単にご紹介しますと、まず、いきなり劇を行ったのです。金性済さんは在日コリアンの３世の方なのですけれども、ご本人の原体験、ライフストーリーを、彼が上手に無言劇という形にアレンジしてくださいまして、それをこのコーディネーター３人と、それからＴＡ（ティーチングアシスタント）にもお願いして４人で、いきなり上演したのです。それが学生にとっては、とてもインパクトがあったようです。そしてさらに、その後それぞれの講師が自分史、自分の物語を語りました。つまり、なぜ、それぞれの講師がこの科目をやる必然性があるのかということです。そのことを語る。それを数回に分けてやりました。

その後は社会学的なアプローチですとか、歴史学的なアプローチ、アカデミックな方法論なども援用し、その間に映画なども見ながら、大教室で 300 人ぐらいが取っておりましたけれども、その中で、できる範囲のワークショップをいろいろ工夫しながら展開いたしました。学生も作業をするといったことをしながら進めていきました。

西原　廉太

その他、単発の講師、ゲスト・スピーカーの方に５、６名来ていただきまして、やはりそれぞれの物語や課題、個人史を語っていただきました。基本的にはすべて在日外国人の方々にお願いしました。在日コリアンの方々、それからイスラムの方、あるいは沖縄、アイヌ、そしてパキスタンなどマイノリティーの方にも来ていただいてお話をいただきました。

ある在日コリアンの女性の方には、チマチョゴリを実際に着て授業をしていただいたのですね。目に見える可視的なものというのが非常に大切であると私たちは考えまして、その方は在日コリアンの物語の絵本を、とてもいい絵本があるのですが、それを自分の証言を交えながら伝える。そのようなこともしていただきました。

そして沖縄の方は、三線（さんしん）という沖縄の三味線を弾きながら、沖縄の民衆性、スピリチュアリーというものを伝えるような歌を歌って下さり、非常に感動したという経験があります。この方は自己紹介の中で、「実は自分は、同性愛者なんだ」ということを明かされたのです。それで、この回の授業は、沖縄ということよりも、学生たちにとってみますと、セクシャル・マイノリティー、同性愛という点が大きなインパクトとなったようで、それがその後、全カリ総合Ａの授業の誕生につながりました。現在、「性倫理とキリスト教」というテーマでその方に授業をやっていただいております。これも、300～400 人のかなり大きな授業になっております。

また、ちょうど学生と同じ年代の 20 代のアイヌの女性の方に来ていただいて、実際にアイヌとしてのアイデンティ

ティー、さまざまな文化的な取り組みなどを話していただきました。

各授業の最後に必ずリアクションペーパー、コメントを学生には毎回書かせるのですけれども、毎回そのリアクションペーパーを分析しまして、そこからキーワードを拾い上げていくのです。そのキーワードを並べていって、プレゼンターで大きく映しながら、それぞれの３人の講師がそれについてコメントし合う。ＴＡにはフロアに降りていただいて、マイクで学生の意見も聞く。その中で、議論を全体で行っていくということをいたしました。そしてキーワードを各自が掘り下げていく。これが重要なのですね。

その他にオプショナルプログラムとしまして、フィールドワークを行いました。授業から得られたさまざまなテーマに基づいて、具体的には例えば、川崎の戸手という在日コリアンの方々の多住地域に行ってみました。それから２年目には大阪の生野に、やはり在日コリアンの街なのですが、二泊三日のフィールドトリップをいたしました。この時はもう授業が全部終わっていまして、単位も出たあとで評価とは全然関係ないのですが、学生が 20 人ばかり参加をしてくれて、私たちももちろん手弁当ですけれども、一緒にプランを組んで、参加した学生がさらに次の授業のコーディネートにかかわってくれるというような展開ができたのは、とても大きかったかなと思います。

学生の反応としましては、いろいろあるのですけれども代表的なものとしては、「自分の中に感情があるということを発見した」ですとか、「生きた声を聞くということが、大学の中でできたということに驚いた」とか、「具体的に物語を聞きながら涙が出た。教室で泣くという経験をした」などがありました。あるいは、「他人と違うんだということの意味。自分とは何なのか。自分のルート、たどりたどってきた道。それから生きてきたプロセスは何なのかということを、あらためて考えさせられる経験をした」。そういうコメントが、かなり寄せられました。

１回１回の授業が、聞いている側が感じたキーワードによって、また一つの大きな物語になっていく。そういう意味で、学生それぞれが持っている自らのストーリーと、教室で語られるストーリーが共鳴するのです。そこから意味が生まれてくるというような授業だったかなと思います。教員が知識を伝えることはもちろん大切なのですけれども、ただそれだけではなくて、いわゆる、ある種の開発教育的なことかもしれませんけれども、一緒につくりあげていくという経験です。

最近の若者の特徴として、無意識、無関心、無感動ということがよく言われますけれども、これらの授業で感じることは、実際には、学生たちは多くのことを知り、関心を持ちたいと考えていること、そして感動しているということです。そのことを発見できたと思います。

そして、この授業を終えていつも感じていたことは、私たち教員たちこそが学び、成長しているということです。そのような経験が総合Ｂという授業ではできる。総合Ｂだけではなくてもできるはずなのですが、特にこの総合Ｂでは可能だったということだと思います。受講者は 300 人ぐらいいるのですけれども、教室の誰一人として、自分の立っている場所をあいまいにすることが許されないのですね。そこから結果として、非常に緊張感で満ちた場が毎回つくられました。ですから、いわゆる私語とかはなかったですね。緊張感で満たされた場であったと思います。

総合Ａにはキリスト教の専門関連授業がありますけれども、この総合Ｂ「多文化・多民族共生社会を考える」では、

当初は担当者全員がキリスト教関係者で、私はキリスト教学科の教員、香山先生はチャプレンであるし、もう一人は牧師さんです。しかし、キリスト教とはひと言も言わないのです。聖書も１回も開かないという、そういった授業でした。しかし、担当しているメンバー全員がキリスト教関係者であるということは、学生には周知のうえでなされていくわけです。

あとからスタッフで総合Ｂの授業のふり返りをしたのですけれども、実は、こういう形の授業こそが、立教の目指すべきキリスト教授業の一つではないかということになりました。もちろん聖書やキリスト教の歴史の知識を伝えることも大事なのですけれども、それだけではなくて、まさにこのような学生たちが感じたり、共感したり、涙を流したりするなかで、自らのアイデンティティーや、自分の存在を確かめていく。人間の尊厳に共感していく。そういった、ともに生きることの中身を深めて考えることができる授業。これこそが、実は真のキリスト教教育であり、またリベラルアーツの中身ではないか。立教大学の建学の理念ではないか。そのように、この授業を通して感じたわけです。

そしてまた教員に対するチャレンジとしましては、専門用語を使わないということです。単純にやさしい言葉に置き換えて変換するのではなくて、どれだけ本質的なところで、専門用語を使わずに伝えることができるかというチャレンジが、この総合Ｂの授業では求められたと思います。それは教員にとっても非常に大きな経験となりました。

そういう意味で、この授業の目的は、最終的には自らのアイデンティティーを問うことにありました。学生たちが問われるのです。私たちも、それは問われます。そして、その中で結果として起こったことは、多くの学生が自らをカミングアウトしていったということです。具体的には例えば、何人もの在日の、普通は日本名で生活している学生たちが、「自分はコリアンだ」ということを言いにきてくれたりですとか、あるいは「セクシャル・マイノリティーである」と言いにきてくれたりといったこともありました。そこまでいかなくとも、自分のありようをかなり明確に確認しながら、この授業の中で自分という存在を広げてくれたようなことがあります。

もう一つのこの授業のポイントは、多様な見方を大切にしたいということ。これも学生に紹介したいのですけれど、文字がεである紙を見せます。学生は、これを「ε」だと認識をしている。そういう常識を持っているのですね。しかし紙を横にしたり、逆さにしたりする、つまり立場と見方を変えれば、これは「m」にもなり、そして「3」にもなり、「ω」にもなる。要するに、そういう多様な視点を自分たちのアイデンティティーとともに発見してほしいということです。

以上で終わりますけれども、最後に少し悩みつつあるところを、皆さんにもぜひ、ご意見をいただきたいと思うのは、自分自身のアイデンティティーを確かめてほしいといったところがこの授業の主旨であるとしますと、どう評価をするのかということなのです。問題は評価です。昨日も私の家に教務事務センターのほうから文書を送っていただいていまして、「授業の評価について」ということで、Ｓが何パーセント、Ａが何パーセントと。それから割合が何パーセントぐらいか。確かに厳密に評価基準を設定することは本来大学があるべき姿だと思うのです。しかし私が思うには、こういったタイプの授業にふさわしい評価というのは、まさにほんもののエバリュエーション(evaluation)、「評価」です。エバリュエーションというのはご承知のようにラテン語からきていますけれ

ども、“ex-value”からきています。「価値を引き出す」のです。自らの価値をどれだけ、それぞれの学生の価値をどれだけ引き出せるかというのが本来の評価である。そういう意味ではセルフ・エバリュエーションと言いますか、自己評価というのが一番適当なのだろうと私は思います。

しかし、それがいまの大学の評価システムの中では、なかなか表現しにくいところがある。そのあたりのジレンマをどうしたらいいかということも、ちょっと悩んでいるところです。

○香山　西原先生は研究休暇中なのですけれども、お休み中に引っ張り出してお話をしていただきました。今お話にあった、全カリ総合Ｂの「多民族・多文化共生社会を考えるー日本社会と民族差別」というのが一つのプロトタイプになりましてつくられたのが、その「信じること、生きること」というチャペルの提案の授業です。

今のお話にありましたように、前に西原さんと一緒にやった時には、われわれがクリスチャンであって、牧師であるということは、もちろん隠していたわけではありませんけれども、そのことを積極的には言わなかったのです。講師の方も、過半数が教会関係だったりしたのですけれども、そのことは一切、切り口にしないでおこうというような暗黙の了解がありました。「信じること、生きること」に関しては、言ってみれば本名宣言をしよう。われわれはキリスト教なのだ。牧師なのだ。それでやっているのだということを前面に出して、そのことを明らかにしたうえでやったら、どうなるかというような発想でスタートしています。

お手元の 26 ページ以下に、だいたいその様子がありまして、今年で３回目になりましたけれども、2004 年、2005 年、2006 年のシラバスをご覧いただくと、だいたいこんなことをやってきたということがわかっていただけると思います。

チャペルが授業をやるということの一つの意味は、われわれは研究したり、授業、教育するということが主たる任務ではありませんので、言葉としてはキャンパスミニストリーという言い方をしてまいりました。つまり、キャンパスの中に生きる、主には学生さんです。もちろん教員も職員も含まれますが、大学の中で生きているその人々のライフ全体に奉仕をするというか、支えるというか、ケアするというか。そういうことをするというのが、たぶんチャペルのはたらきだと思います。

そのうえで、言ってみれば、われわれの本番は教室の中にあるのではないのですけれども、まずは学生との接点を多く持たなければいけないという一つの悩みがあります。先ほど、正課外プログラムに来るような学生たちはみんな意識が高いけれども、そうではない学生にどうアプローチするかという話がありましたが、チャペルもおそらく同じ課題を抱えていて、チャペルに接近してくる学生はまだいいのですけれども、そうではない学生にこそ、むしろわれわれはかかわるべきなのではないか。そして、とにかく授業をやろう。一人でも多くの学生の前にチャプレンは立つべきだ。そして、ちゃんと自分自身を開示して身をさらしていこうということで、こういう授業を始めるようになりました。

立教大学全体にかかわることかもしれませんが、私たちがやりたいのは、キ

リスト教に関する授業ではなくて、キリスト教に基づく授業だというふうに思っています。もちろんキリスト教学科の中ではキリスト教に関して教えなければいけませんが、私たちはより広く、キリスト教の『聖書』に何が書いてあるというようなことではなくて、キリスト教に基づいてわれわれがものを言うというようなことがポイントだったと思います。

そして、実際の授業で展開されたことは何かといいますと、私はこんなふうに信じていて、だからあなたたちも教会へ来なさいというようなことではなくて、実際に私がキリスト者であるかどうかということは、取りあえず置いておいて、実は私はこういう人間で、こうやって生きているのだということを、思いきり自分自身を語っていただくということをしてきたと思います。

しかもお招きしたほとんどのゲスト・スピーカーの方は、言ってみれば、日本社会のひずみであるとか、人間の弱さであるとか、そういうものに直接かかわるような現場で、ご自身が痛みを受けたり、あるいは痛みにかかわってきたような方々なのです。そういう方に、なぜ自分はそういう生き方を選んだのか。何で自分は日雇い労働者にかかわっているのか。何で自分は障害のある人と一緒に生きようと思ったのかというようなことを語っていただき、そういう私が、実はクリスチャンなのだと。自分にとってこういう人生というのは、自分の価値観の深い部分と密接にかかわっていて、自分にとっては、たまたまそれはキリスト教なのだ。あるいは、『聖書』の教えなのだというようなことが、ずっと語られてきたと思います。

2004 年、2005 年、2006 年と、ちょっとずつ切り口を変えておこなわれてきました。１回目は「多民族・多文化共生社会」とほぼ同じようなスタイルで、２回目は、よりチャプレン自身の語りを増やして、そして３回目、2006 年度は、より、今度は一人のチャプレンのコンビネーションによって、多彩なゲストを呼んでこようというようなことで展開をしてきました。

チャペルはそもそも正課外のプログラム、正課外教育にかかわる部局でありますけれども、そこが正課、いわゆる授業と直接かかわるということがどういう意味があるのだろうか。これは、こういう意味があると端的に申しあげるのはちょっと難しいのですけれども、私たちの経験としては、結局その学生のあらゆる場面にかかわっていく必要があるという点で言えば、教室内の学生とも出会いたいし、教室外の学生とも出会いたいし、キャンパスを離れた学生とも出会いたい。そのためにも、われわれの視角を広げたいというのが大きな意味であったと思います。

そして多くの学生が、キリスト教とか、牧師とか、『聖書』とか、チャペルというものに対して誤解と偏見がいっぱいあるということも、これでよくわかりましたし、学生のキリスト教認識を正しく把握したうえでやっていかなければいけないということもわかりました。同時に、私たちが毎回リアクションペーパーを読みながら、こういうふうに学生は受け取れるのかというようなこともたくさん学んだということを、この授業を通して得た成果の一つだと思っています。

学生の声を少し紹介しようと思いまして、今日はこの授業を受講していただいた市毛さんにお話をうかがいたいと思います。実は、市毛さんは１年生の時に履修し、３年生の時は、単位にならないのにもう１回聴いていただいたということですので、残りの時間は市毛さんに、実際に聴いてどうだったかというところをお話しいただきます。

○市毛　文学部フランス文学科３年の

市毛と申します。よろしくお願いいたします。

私は、今、香山先生がおっしゃってくださったとおり、実は、今年だけではなく 2004 年度も、この「信じること、生きること」という講義を受講しておりました。最初に私が入学した当初にこの授業を受けようと思ったきっかけなのですけれども、毎年毎年、持って帰るのもおっくうになってしまうような分厚い講義内容の冊子が配られるのですが、それをぱらぱらとめくっていた時に、たまたまこの総合Ｂの科目を目にしました。その時に、先生からの講義というだけではなくて、外部からたくさんのゲストスピーカーをお招きして一つのテーマについて語っていただくという形式が、これは本当に他の講義にあまり見られない形式で、とても興味深いと感じたのです。

あと、タイトルに「現代を生きるキリスト者の生」と書いてあるところです。私自身はクリスチャンではないのですけれども、今、所属しているサークルは学生キリスト教団体ということもあり、また、せっかく立教大学に入学したので、少しでもキリスト教らしさに触れてみたいという気持ちもあって受講を決意いたしました。

まず 2004 年度の講義で、最初に思った感想です。キリスト教というテーマにかかわってはいるのですけれども、決してそれは宗教を押し付けるということではありません。例えば、私はクリスチャンなのでキリスト教を信仰しています、そして、毎週礼拝に出てお祈りしていますとか、宗教に自分がかかわっているかということが重要なのではなくて、キリスト教を通じて、自分がどのように生活して生きているか、自分で自問自答して追究していくということが大きなテーマだということがわかりました。

先ほど西原先生がおっしゃっていたのですけれども、ゲスト・スピーカーの方が授業の中で自分のアイデンティティーについて語ってくださったことがありました。自分がキリスト教の牧師であるということ、「うちなんちゅう」という沖縄生まれの方であるということ、そして３番目に、いきなり授業の中で「自分は同性愛者です」とカミングアウトをしたのです。その衝撃を、私は今でも忘れることができません。

ただ、そのお話を聞いていくうちに、例えば自分が今ここにいて、まわりにいろいろな人がいて、でも、自分はその相手のアイデンティティーを理解しているつもりでも、自分がとても信じているなと思っている人でも、なかなか自分の弱点とか、弱みというところを話せない部分があるから、まだまだわかったつもりでいるだけで、実際には相手の本当のことをわかってあげられていないのではないかなと私は感じました。

そして 2006 年度の授業では、最初の 2004 年度のようにゲスト・スピーカーの方を招いてお話を聞くという形式で、2005 年度はちょっと事情があって受講できなかったので、また 2006 年度も同じように、今度はキリスト教というよりは、しょうがい者とのかかわりということで、別のテーマで受講しました。

2006 年度は、大きく分けて二つテーマがありました。大きなテーマはしょうがい者ですが、その中で一つは、しょうがい者施設などで働いている方でしょうがい者とかかわるお仕事に就いている方のお話。そしてもう一つは、しょうがいを持っている方が直接お話をしてくださいました。

一つの講義の中で、まったく正反対の二つの視点からの意見を聞くことができました。しょうがいと聞くと、バリアフリーという言葉が盛んに叫ばれています。実際には、しょうがいを持っている方の意見としては、そういうことをし

てくれるのは、ありがたいのかもしれない、でも自分は社会にとって迷惑な存在なのではないかなと思い込んでしまって、なかなか自分の意見を率直に他の人に言うことができないという、そんな悩みを抱えているということを率直にお話ししてくださいました。

実際に施設などで働いている方も、自分はどこまで手助けをしたらいいのかということも、お仕事の中ですごく悩んでいるということもお話ししてくださって、やはりそれも、相手をどこまで信じているのかということによって、心の中のバリアフリーというのが非常に重要になってくるのではないかなと感じました。

私がこの授業を２回受講してみて感じたことは、「信じること」と「生きること」という二つの大きなテーマが、どのように関連してくるのかは、本当に十人十色だということです。最初は、その関連性が私はよくわからなくて、何度も、何度もゲスト・スピーカーのお話をメモしたりして聴いていました。信じることというのは、これはあたりまえかもしれないのですけれど、人によって信じているものというのは、だいぶ違うのだなということがわかりました。

例えば同じクリスチャンの中でも、キリスト教を信仰しているといっても、キリスト教の中でどういう部分を信じているのかということは、本当に人それぞれで、『聖書』に書いてある物語を全部、「あれは真実だ」といって信じている人もいれば、「神の存在は信じているけれど、死後の世界は信じていない」とか、そのように人によって信じているものが少しずつ違っているということが、講義の中で少しずつわかっていきました。

それはクリスチャンに限らず私たちも同じことであって、信じているものは人それぞれ違っていて、その何か一つでも自分にとって信じられるものや、人や、希望があれば、自分はそれに向かって、もっと前向きに、豊かに生きられるのではないかなと思います。それが、キリスト教とかかわる人々にとっては、キリスト教とか、神とか、そういう存在であって、例えそれは宗教などにかかわっていなくても、自分たちの中で信じるものが何かあれば、生きることも、より豊かになっていくのではないかなと思います。

おそらく、生き方に決まった正解はないので、自分が何を信じればいいのかということを私たちは人生の中で模索していくのではないかなと私は思っています。私は、何を信じればいいのかということについては、まだまだ考えている最中ではあるのですけれども、そのためには、まず多くの人々に積極的に出会っていきたいなと思っています。人によって、その人がどういうことを信じているのかということを、いろいろな人に出会って知っていくことが、今の人生の目標です。

この講義を通して、その多くの人々に出会いを求めるということを、講義の中で私は実践できてきたのだなと、いまあらためて実感しました。何度も出てきたキーワードの中に「きょういく」という言葉があるのですけれど、これは、教え育（はぐく）むの「教育」ではなくて、共に育むと書いて「共育」という言葉になっております。人との出会いを通して、共育ということを私はこれからも実践していきたいなというふうに感じております。

市毛　友里さん

以上で終

わりにいたします。ありがとうございました。

○司会　どうもありがとうございました。

今、また「豊かに生きる」と市毛さんがおっしゃいました。このシンポジウムは「生き方を問う」というテーマです。「信じることと、生きること」という今回のプレゼンのテーマは森有正風ですが、もっと実践的で現実的な内容でした。先ほどの「仕事と人生」は、「働くことと生きること」と言い換えてもいいのではないか、「対人コミュニケーション」のプレゼンの内容は「コミュニケートすることと生きること」と言い換えることができると思います。

生き方ということと、私どもの教育ということの可能性についてですけれども、今の三つのプレゼンを通じて、立教大学らしい何かが伝わったのではないかと思っております。

それでは、すぐに第２部のほうに移らせていただきます。ここで皆さんにステージに再登場していただいて、シンポジウムの第２部を始める前に、白石典義経営学部長からコメントをいただきます。よろしくお願いいたします。

○白石　こんにちは。経営学部長の白石です。事前に先生方からはお話をおうかがいしていませんので、今日のご報告を聞いた範囲に限ってのコメントをさせていただきます。

最初にそれぞれのご報告についての私なりの印象、そのあとに、ご報告にあった科目内容などを越えて、そういうご報告を受けての立教大学全体の教育に関する私の思い、気持ちをお話したいと思います。経営学部は 2006 年の４月に開設されまして、それなりの思いもあって新しい学部として設置しましたので、経営学部長としての立場からみなさまのお話をうかがってのコメントとして、こうしたいなとか、こういうところが改善すべき点ではないのかということをお話ししたいと思います。

まず、総合Ｂが導入されてだいぶたちます。皆さんもご存じと思いますが、他の科目に比べてかなりコストをかけて重点的に展開しようという試みが、この総合Ｂによって初めてなされたわけです。担当する部局も、その後、教学に責任を持つ部局だけではなく、学生支援を担当している部局を含めて、その範囲が大きく広がりました。

今、この総合Ｂの方式を学部でも採用するとでも言うのでしょうか、経営学部ではご報告にあった「仕事と人生」の次に位置するものとして、全カリ総合Ｂの学部バージョンとして、「企業人セミナー」という名称でキャリア支援科目を展開する計画です。先般の教授会では、方式としては総合Ｂのような、ただし「総合Ｂ」と呼ぶと区別が付かなくなりますので「総合Ｂ」の名称は用いませんが、概念的にはかなり似た科目を学部で展開することを決定しました。そういう意味で、全カリの新たな試みが全カリだけにとどまることなく、全学に広がっていく。それが非常に大事なことだと思っております。

つぎに、それぞれのご報告についてコメントを申し上げます。まず「対人コミュニケーション」についてですが、福原カウンセラーからご指摘がありましたように、大学に入学してくる昨今の学生のコミュニケーション不足とか、アクティブな活動ができず常に受け身で自己の範囲にとどまるとでも言うのでしょうか、そういう点を学生に自覚させ、コミュニケーションスキルを身につけさせることが重要だと思います。

ほぼ同様の内容を持つカリキュラムを、経営学部でも用意し、開設初年度の今年から実施しました。「対人コミュニケーション」は４日間の集中ということですけれども、経営学部では新入生のオ

リエンテーションが終わる週末に一泊二日で「新入生キャンプ」を実施しました。内容は、アイスブレーキングから始まって、ＫＪ法によって大学４年間をどのように過ごしたらよいかということの議論をし、検討内容を絵にまとめてグループ報告を行い、かつ新入生全員の前で発表させました。この「新入生キャンプ」は、１年次の前期に始まる基礎演習に引き継がれることになります。基礎演習は「リーダーシップ入門」というサブタイトルを付けています。「対人コミュニケーション」では第８回目ぐらいにグループとリーダーシップについての授業があるということですが、経営学部の特徴として、われわれはリーダーシップを中心に授業を展開します。これが１年の前期です。そして、１年次の後期に入っても同様の科目が展開され、さらに３年の前期まで半期ごとにステップアップしながら続くことになります。経営学部では、この２年半にわたる科目展開の全体を「リーダーシップ・プログラム」と呼んで、カリキュラム展開のひとつのコアとしています。

私は、この続くということが非常に重要ではないのかと思っています。単発の授業展開では限界があるのではないでしょうか。全カリの場合には、全学の学生を対象にしていますので、継続して実施することには困難があるでしょう。そういう意味では、全カリの試みと学部の試みが連携し合って、系統立てて展開されるということが非常に重要ではないのかなと思いました。

「仕事と人生」については内容もネーミングも素晴らしいと思います。先ほど井上先生から、最初はどのようにコンセプトを作っていくのか大いに悩んだとのお話を伺いました。大学で展開する授業であるから、プロフェッショナルやボケーショナル（vocational）なキャリア教育ではなくて、やはり大学で展開するキャリア教育として新しい内容を考え、ネーミングとして「仕事と人生」を採用したとのことでした。生きるということと仕事の関連、まさしく生きていくための基礎知識を提供しようという、時宜を得た企画であったと思います。

白石　典義（コメンテーター）

カリキュラムの内容を拝見いたしまして、まず、自分の人生とか仕事を考える、考えることができる基礎知識を身に付ける。そういった授業であることがわかります。でも、その次の段階に、やはり大学で授業を学びながら、専門科目を勉強しながら、さらに継続して仕事と人生を考えていく、そういうステップがやはり必要ではないのかなと思います。ですから、私は「仕事と人生」を、私の学生に対して是非とも履修しなさいと推薦するとともに、各学部でも継続して同じようなコンセプトを持つ科目を展開していくことが重要だと考えています。

われわれの経営学部では、先ほど話しましたように、全カリ総合Ｂと同じような形式で「企業人セミナー」を展開します。仕事で輝いている人、輝いていない場合もあってもいいかとも思いますが、いろいろな方を社会からお呼びして生きていくモデルを示す。学生にそれを見てもらって、その中から「自分も、こういうふうになりたいな」とか、「そうはなりたくないな」とか、そういうモデルを示し、学生が自分なりの仕事と人生を考える機会を提供することが重要ではないのかと思います。

そういう意味では、先ほど言いました

ように、全カリと学部教育との連携というのは非常に重要だと考えます。

さて、「信じること、生きること」について、立教大学の建学の精神にかかわる授業は非常に大切だと思います。そういう意味で、先ほど申しあげました経営学部の一泊二日の新入生キャンプでは、立教大学の建学の精神について、西原先生をお招きしてお話を聞くことにしました。西原先生は新入生に向かって話してくれているのですけれども、壇上の後ろに並んで聞いていた教員からも、終了後に「あれはよかった」との話を聞きました。西原先生のお話からは、教員、学生ともども、もしかするとすでに大学に在籍している教員の方がむしろ立教に対する理解を深めたのではないのでしょうか。学生はもとより、教員に対しても建学の精神に関する教育は必要です。この点については、現在のところ全学的にやや配慮が欠けるところがあるのではないでしょうか。

先ほど、「信じること、生きること」では授業中の私語がほとんどないとの報告でした。非常に結構なことだと思います。そういうノウハウは、ぜひとも全学部で共有しなければならない。率直に申しあげて、私語は立教大学ではかなり大きな問題だと思います。一部には、他大学と比べても私語が多い。その理由が何なのかというところの分析というのは残念ながらまだまだです。さらに進めて分析し、その対応を早急に全学的で考えるべき時だと思います。

やはり、立教大学の学生として学ぶ姿勢を全学で共有する必要があると思います。今日のご報告のあった科目は素晴しい科目ですから、その内容や教育方法などを全学で共有しなければならない。個々の科目担当者とか、それぞれの科目とか、全カリの科目ということにとどまらず、立教大学全体のベースになる学ぶ姿勢を、多くの科目が連携して、醸すような、築きあげるような、そういう方法がないだろうかと考えます。解答があるわけではなくて、それはみんなで考えなければいけない。特に、学部の責任者はもっと考えなければいけないと思います。

その他に、評価方法について悩みもあるといったようなお話もありました。授業の内容や教育方法がそれぞれであるのに対応して、それなりの異なる評価方法があっていいのです。ですから、S、A、B、Cの評価方法を画一的にすべての科目に採用しろという考えの方がおかしいのではないでしょうか。そういう意味ではやはり、官僚的に対応するのではなく、授業科目の内容に応じていろいろな採点や評価のあり方もあっていいのだということを全学で共有したいと思います。

最後に、ちょっと時間が迫ってきましたが、ご報告のあった科目を離れて言及したいことがあります。経営学部でも全学で見ても、公開講演会に対する学生の集まりが非常に少ない。全学レベルでは、公開講演会はほぼ毎週、年に200回ぐらい開催されているのではないでしょうか。一部の公開講演会には、著名人が出席する場合などでは学生の出席が多い時もありますが、そうでない場合の方が圧倒的に多い。立教の学生より外部の方が多いケースがよくある。それではというので、学生諸君については授業の一環として出席を半ば強制することもある。これも、ひとつの方便だとは思いますが、やはりちょっと違うのでないでしょうか。

すべて大学で用意してくれるのですね。公開講演会に限らず、「仕事と人生」や「企業人セミナー」でもそうです。学生が黙っていても、先生方が一所懸命、毎回すばらしい講師を集めてくれる。アルバイトがあるから今日はやめにしようとか、ちょっと面倒くさいからパスし

ようとか、そういう受け身の態度が蔓延しているのではないでしょうか。授業全体を構成して、それなりの人を集めるということがいかに大変な苦労であるかを、きちんと評価できると同時に、学生自らもそれに積極的に参加していく。そういう雰囲気を立教大学に作り上げたいと思います。立教大学全体の中で、どうやったらそのような学生諸君を４年間通じて育てあげていけるのか。それが可能となるカリキュラムを全カリともども経営学部では考えて行きたいと思います。

いただいた資料の「仕事と人生、そして」と題する文章で、井上先生は「受講生の問題関心や理解力、情報読解力の程度によって、その消化度に深浅の違いは避けられない」と言及されています。本当にご苦労なさっていると思います。しかし、その苦労は私どもも一緒ですので、何とかこれを解決するような、そうなることによって、立教大学の教育のクオリティーというのをもう１歩、もう２歩、上げることができるような方向性を共に模索していきたいと思います。

今回の講演では、リベラルアーツ教育が謳われています。本日ご報告のあった三つの科目は、その内容としてはリベラルアーツそのものだと思います。しかし、私のイメージするリベラルアーツでは、科目の内容だけでなく、立教大学の発足時にあった、カレッジ式の教育方法も重要だと考えます。当時は、授業内容はもちろんそうですけれども、教員が学生の名前を全部知っている。そういう中で教員と学生が日常的に接触しながら、お互いを尊重しつつ、課外活動を含む全人格的な教育が行われている。それこそがやはりリベラルアーツの真髄で、だから授業内容だけではなくて、学生と教員の接し方や課外活動などということを含めてのリベラルアーツ教育だと思うのです。

現在の立教大学では、それをすべてについて実践にしろということは、規模から考えてこれはおそらく不可能だと思います。ただ、その有機的なコンビネーションであれば実践可能だと思います。授業で言えば、少人数の授業と中規模の授業がある。例えば、私の専門分野である経済学の理論を教えるという場合には、ある程度の大教室でも可能です。ですけれども、今日のお話のあったような授業は、特に「信じること、生きること」といったような内容の授業は、まさしく本当の意味でのリベラルアーツを実践しようとするものであり、そのような全カリ科目と連携して、リベラルアーツ教育を実現するような専門科目群の展開を各学部で創意工夫することが非常に重要だと考えます。

今日のお話をおうかがいして、個々の先生方であれば、担当する科目をどのように展開するのか、それぞれの学部・学科の責任者であれば、学部・学科のカリキュラムの内容をどのようにしていくべきかとの思いに対して強い刺激を与えてくれましたことに、私は感謝をしたいと思います。

○司会　どうもありがとうございました。

それではフロアとの質疑応答に 15 分ほど時間をとりたいと思います。ぜひフロアから忌憚のないご意見なりご質問なりをいただければと思います。全部で三つ、「対人コミュニケーション」「仕事と人生」「信じること、生きること」という総合Ｂ科目についてご報告をさせていただきましたけれども、いかがでしょうか。

では、質問を誘導するという意味で、司会者の特権で、簡単でけっこうですので、「対人コミュニケーション」の佐藤さん、「仕事と人生」の加藤さん、「信じること、生きること」の香山さんにひと言ずつお願いいたします。

○佐藤　「対人コミュニケーション」の説明はもちろんなのですけれども、私たちが展開していることのねらいを説明させていただいただけではなくて、他にも、本当に立教らしい授業が展開されているのだということをお聞きすることができてよかったかなと思っております。

○加藤　就職を扱う部署が学生成長支援の一つの部署であるということ、成長を促すために就職活動は非常に効果があるのだということを我々がもう少し全学的に発信しないと、就職のための部署ということで、学生成長支援という概念から落ちてしまうということを、今日逆にあらためて思いました。

○香山　「信じること、生きること」という授業は、架空の世界とか理論ではなくて、信じて生きている人間から学ぶということを目標としているのですけれども、考えてみれば、それが経済の理論の授業であれ、そのことに人生をかけて生きている教員、研究者、教師が目の前に立っているという意味では、学生はその姿を見て生き方を学ぶ、人生を学ぶという、それは本当はできるはずなのだとは思うのです。

ただ、こういう私たちのセッティングというのは、とてもそれを親切にして、はい、皆さんここから生き方を学んでみようよと、あえて呼びかけをしたのだと。そうではなくて、本当はすべての授業というのは、一人の教師、あるいは一人の職員の姿に、生きる姿、あるいは彼の信念、彼女の信念の根底は何かというものを学生さんが学んでいただけたらいいなと思いながら聞いていました。

○司会　ありがとうございました。それでは、フロアから何かご質問等ございますか。

○山本　山本です。チャプレンに来ていただいて、教員に対して、例えば建学の精神やキリスト教についてなどをきちんと伝える、そういう場が必要ではないか、とある先生に言われたことがあります。

実は、よく考えてみると、「対人コミュニケーション」、「仕事と人生」、キリスト教関係の規律とか、これらは全部、実は教員が苦手なのだと実感するわけですね。だから対人コミュニケーションがなかなかうまいこととれないから、セクハラがあったり、アカハラがあったりするわけだし、仕事と人生という観点を持ち得ないからこそ、なかなか学生が質問に来ない、なかなか相談にも乗ってやれないと思うわけです。自分の生き方というのをきちんと示せたかどうかが、やはり授業の質というものにからんでくるのだなとあらためて思いました。

○柳　チャプレン室の柳です。三つの部局の発表と学生の生の声を聞くことができて、とてもよかったと思います。来年度の「信じること、生きること」を西原先生とご一緒に担当させていただきますが、今お話を聞きながら、もうちょっと考えて準備していかないといけないと、そういう反省をこの場でしております。

一つ質問ですけれども、全カリ運営センターから見ると、この三つの科目は生き方を問う授業ということで、共通点があるということで今日一緒に発表になったと思うのですが、事前に私はチャプレン室に主にかかわっている者として、キャリアセンターの授業とか、学生部の授業の中身をもうちょっと前に聴いたとすれば、来年度の全カリの授業において少し頼るべきところがあったと、そのように思ったのですが。

もし今日のシンポジウムの前にこのための打ち合わせ以外に、この三つの部局が話し合いの場を設けたことがあるのかというと、実は私は聞いたことはないのですが、今後はこういう今日のシンポジウムだけではなくて、もうちょっと

話し合いをして、科目として立教らしい授業として発展していく、そういう余地があるのではないかと感じました。

○上田　全カリの総合部会長ですので、内輪という立場で意見をのべさせていただきます。

今回やはり、土曜日ということもあって参加者が少ないなと感じています。やはり大学の中でどれだけ全カリにかかわる教員を増やしていくのかということが、たぶん一番大きな問題だろうと思います。

白石先生からのコメントの中で、新入生向けの合宿という場で教員が初めて建学の精神に接するというようなことを言われていました。そのような場をいろいろなかたちで組んでいくということも全カリ総合の一つの役割だろう、授業にかかわりながら、まず建学の精神というのはこういうものだということを教えながら実体験していくということもあろうかと思います。

今日のコメントでいただいた、今後につなげていくということについては、早速検討して具体化に向けていきたいと思っています。

あともう一つ、今年度から始まった新しい授業で、「立教生の学び方」という授業があります。たまたま昨日、その講義担当者のミーティングがありました。

前期の担当者のミーティングの時には、導入教育というのがわりと前面に出ていたために、１年生だと思って準備をしていたら４年生など高年次の学生が履修していたため、準備と対応できなかったので、４年生とか３年生がだんだん、授業が回を追うほど少なくなって、とうとう１年生しか残らなかったという話が出ていました。

２回目それを担当してみるといろいろ、１回目の経験を踏まえながら、４年まで含めて教えていくという経験をして、専門教育の授業とは違う経験。専門教育の場合は、１年、２年という形で段階を踏んでいくわけですけれども、全カリの場合は１年から４年まで、しかも学部が多様という中で、教員はまさに壁にぶつかったり呻吟するわけですけれども、そんな中から教員が育っていくという場として、「立教生の学び方」があるのではないかと。そのような中に建学の精神ということを、教員も学ぶ場として、ＦＤとからめて進めていくということもあろうかと思っています。

今回思うことは、やはり教育基本法の改定があって、おそらくこれから大学に対する国家の介入が強くなっていく時に、立教のらしさというのでしょうか、建学の精神に基づいた自由の学府という精神を生かしていく必要があるでしょう。そのためには、全カリを中心として全学にネットワークを広げていかなければいけない時期に来ているのかなということを、非常に強く思いました。

そういった意味で言うと、責任は重いわけです。来年度はどういうシンポジウムになるかわかりませんけれども、来年度にシンポジウムを開いた時には、わんさかとは言いませんけれども、会場に熱気があふれるようなかたちにぜひもっていければと思っています。今日はどうもありがとうございました。

○矢治　立教大学理学部の矢治と申します。日ごろは理学部現代ＧＰの理数教育学のプログラムコーディネーターとして仕事をしているのですけれども、今日こういった機会があるというのでお話を、非常に興味深く聞かせていただきました。

「仕事と人生」のところで質問があります。さきほど就職というところにこだわってしまうと埋没してしまうという話があったのですが、一口にキャリアといっても、ただ就職するだけではなくて、大学院に行くという選択肢もあります。特に理系だとそういうところが強いわ

けですが、他にも留学したりとか、あるいは、自分のキャリアに厚みをつけるためにいろいろな資格を取ったりとか、そういう選択肢もあるかと思います。

過去にはあったのかもしれませんが、今年のシラバスを見ている限りはそういったところはあまり触れられていないようです。例えば立教大学の場合、専科の大学院に入学したりとか、あるいは社会に出てからまた大学院に戻ってくるとか、いろいろな選択肢が今後出てくると思います。そういった部分の内容というのは今後どのように扱っていくのでしょうか。

○井上　おっしゃるように、理工系の学部学生が、大学にもよりますけれども、国立ですと半分近くでしょうか大学院、マスターコースには行きますので、もちろんそのことが念頭にないわけではないのですが、過年度さまざまな働き方ということでＮＰＯであるとかＮＧＯであるとか、あるいは派遣といったような、いわゆる正社員を念頭にした働き方ではない働き方の講義は設けましたけれども、大学院は残念ながら設けておりませんでした。

たしかにおっしゃるように、限られた12回か13回ぐらいの講義の中でも、大学院で学んで、専門的な水準といいましょうか、識見を高めていくということの意味についての講義を一コマでも設けることができればと思っております。それは将来の課題として残っております。

ただ、外資系とか公務員であるとか、そういうところでの働き方については、これまで展開してきております。いずれにしても、課題として検討していきたいと思います。

○寺﨑　学院本部・大学総長室調査役の寺﨑昌男と申します。10年前に全カリが出発をいたしましたころ、企画をしていた私などの感じで言いますと、当時は各学部がお出しになる複数教員担当の総合科目は、いわば各学部のウインドウだ、そういう科目をつくるのだという程度の気持ちで企画したと思うのです。したがって、どこが出してくださるか、出さない学部があったらどうするか、そういうレベルで考えておりました。

しかし、それから10年後、今日のお話をうかがって、非常に深化発展されたなと、あらためて感動いたしております。今後も大いに頑張っていただきたいと思います。

お聞きしたかったことの一つですが、ある学会での体験を思い出します。大学教育学会のあるシンポジウムで、やはり「生き方を学ぶための教養教育」というのをやったのです。そこで発表されたのは、教育関係の方が多かったのですが、比較的若手の教養教育担当の先生たちが、学生たちにどのように人生選択について教えているかという趣旨の話をされたのです。

その後の討論で、質疑応答になった時、ある会員の人が、「今いろいろなお話を聞いて、われわれの若かったころよりも大学がとても親切になられたことはよくわかりましたけれども、例えば公害問題ということについて、またそれにどう対応するかというようなテーマについては教えておられますか」と聞かれたのです。

すると、それに対してはどこからも答えがなく、非常にみなさん困った顔をしておられた。聞かれた方の存在も非常に重くて（当時沖縄大学におられた宇井純さんでした）、非常に重いシーンとして残っております。

つまり、私の言葉で言うと、学生諸君は自分の物語、すなわち小さな物語と、時代の非常に大きな物語とをつないでいくことに、実はあまり得意ではないのではないかと思うのです。どころか、だんだんその差は大きくなってきている。したがって、外から見ると、自分のこと

には熱心なのだけれども、大きい物語に対してはむしろ無関心であるという、そういう実態が浮かんでくるような気がするのです。

どのグループでもけっこうでございますが、学生本人の経験や体験を、擬似的な体験、あるいは行動、活動等を通しながら、大きい物語のほうへ、どのようにつなごうとなさっているか。そのあたりについて何かご経験がありましたら、お聞きしたいのです。

○司会　ありがとうございました。たしかに、ミクロの世界とマクロの世界との断絶というか、その間を埋めるイマジネーションのなさが問われているわけですけれども、香山先生、お願いいたします。

○香山　適切にお答えする自信はありませんけれども、おそらくこのチャペルが提供し、またその前段階で西原先生と一緒にやった授業は、そうした自分自身の小さい物語というものを無視するのではないけれども、そうした大きい物語と出会って、そこでじゃあどうするのかということを悩みながら、一所懸命やっていく人たちの姿というものだったと思うのです。

ですから、ある意味では、ある人にとっては、そんなマイノリティーの問題は知らなかったのか、あるいは南北問題とは聞いていたけれども、実はそういうことだったかとか、そういういろいろな気づきがたぶんあって、授業そのものは十数回ですけれども、ある時には、授業の枠外のワークショップをやったり、フィールドトリップをやったりいたしましたし、多くの場合に、例えば何かの具体的な現場を持っている方が講師でいらっしゃいますので、後日その方とのいろいろなつながりができまして、ある人は外国人労働者の支援活動にかかわるようになるとか、いろいろなそういうことが起こってきました。

ですから、授業そのものは入り口を提示して、こういうことはどうなのかという問いかけでおそらく一定の目的は達せられるのではないかという気がいたします。その先に、そこで刺激を受けた学生自身が、より自分自身と、先生がおっしゃるような意味での大きな物語との葛藤といいましょうか、実はより大きな世界があるということとか、そこの中で小さな人間が営むことですとか、そういう発見、気づきがあれば、それはちょっと意味があるのではないかなというような感じがしております。

○井上　今日のシンポジウムで、他の科目の内容や展開をうかがいながら、今のご質問に対して思うのは、小さな個別的なストーリーは、実は大きな物語をそのものを通して語りうるパースペクティブを持っている可能性があるということです。その要件は、個別の物語でも閉じられてはならないということで、開かれた個別の物語が、広い世界にブリッジをかけることができるではないかということを、私は今日のシンポジウムから学びました。

それは例えば、今日のシンポジウムの中で紹介された科目の展開を貫く、一つのキーコンセプトは多様性ということだと思います。私も「仕事と人生」で、実は講義一つ一つは独立性が強くばらばらなところがあり、統一をとれていないので困っているのですが、しかしそれは、観点を変えると、多様な働き方、多様な生き方を提供するということで別

質疑応答

の価値をもつものではないかと思います。おのおのの科目の特性に基調づけられながら、結局学生は多様な生き方を学んでいくわけです。

日本社会が最も難しいのは、その多様性に欠けていたからです。国際化されていく中で一番問われているのは、まさにその多様なあり方を受容する、トレランスといいますか、寛容ですね。日本社会が凝集力のある、それがゆえに単一の価値基準に染め上げられて、非常に集合的な力を発揮したのは、ある意味では多様性を閉じ込めて、一つの単調な目標に向かって人々を動員していった、内面から動員していった、また人々の間にそれを寛容するある種のモメントがあったからだと思います。

そういうものを否定するためには、いま私たちがやっている授業は非常にささやかな試みではあるのですけれども、多様性という大きな世界に向かってブリッジをかけていく試みではないかと思います。

大きな物語はかつて、ソ連の崩壊で基本的になくなったといわれて、個別の宗教であるとか、個別の物語に逼塞（ひっそく）しているような状況ですが、もともと大きな物語が存在するということ自体がフィクションであって、それに縛られてきたところに問題があったといってもよいのではないか。そういう幻想を打破するのは、開かれた個別性―小さな物語を徹底させることによってしか普遍へと向かうことはできない、ということをおのおのが自覚することによってではないか、と思います。大きな物語ではなく、小さな物語が織り成す多様性の世界こそが、価値あるものだと思います。答えになったかどうかわかりませんけれども。

○福原　実は、学生部でも、今はやっていないのですけれども、学生部セミナーというのを過去においてやっていたことがありました。それは「環境と生命」というテーマで、年間を通して毎年テーマを、例えば食の問題ですとか、水俣の問題ですとか、その他、有機農業の問題など、様々な問題に焦点を当てて取り上げて来ました。

そういうことで、ただ単に環境ということを、一方的にこういう環境がありますよという情報を提供するだけではなくて、学生たちがそこに参加して、自分たちの生き方がそこで問われる、こういう環境があります、こういう問題がありますというところの中で問われている、要するに個人の生き方、どのように社会にかかわって生きていくのか、あるいは現代の社会をどのようにとらえていくのかということを大切な視点ととらえ、農業体験などのプログラムとして実施してきました。

先ほど公害と先生がおっしゃいましたけれども、公害も含めて、日本の社会の中で環境がどのようになっているかということと、実際に自分が、例えば農業体験を高畠でしてみるとか、いろいろな、今も林業体験というのをおこなっておりますけれども、そういう個の生き方と社会のあり方を、まったく別のものではなくて、問いかけながら自分の生き方、要するに個の生き方を解いていくということをやってまいりました。これは課外教育プログラムでおこなっていたのですが、今後これを大学の正課として取り上げていく必要もあるのではないかなということは個人的に考えております。以上です。

○西原　寺﨑先生のコメントは大変興味深いものです。やはり私は、ある種の解釈学的循環の方法論を授業を通して提供しているのだろうと思うのです。つまり、いわゆる個別と普遍の間の循環をぐるぐるやりながら、そこから意味を引き出していくといいますか、個別具体的な現場性とか日常性、そういったものと

ぶつかりながら、そこにとどまることなく、そこからさらに普遍的な意味を引き出しながら、また普遍性にとどまることなく個別性に返ってくる、そのような循環をしているのだろうと思います。

そして、その中で解釈として扱うテキストが、ただ単に教科書だけではなくて、生身の人間もテキストとなり、そしてこの社会の現実や現状やさまざまな事柄もすべてテキストとなった時に、学生たちの視野が本当に広がっていくのだと思います。それは、さらに専門性にもつながっていくと思います。文学部であろうが、社会学部であろうが、経営学部であろうが、すべてのその専門性の中に生きていくのだろう。そういう方法論をむしろ全カリは提供しているのだろうと考えます。

○加藤　私たちの部署は全カリと専門を学んだ学生たちがその後目の前にどんどん来るものですから、ついついフィードバックしたくなるのですが、全カリだけではなくて正課の授業の中に現代的な課題を取り入れ、教員と学生、学ぶ者と教師が対峙してやりとりすれば、自分の存在とその存在する社会が必ず結びつくと私は思っているのですが、なぜか就職時を迎えても、学生たちは先ほど申し上げましたが、不思議なくらい社会とつながっていないのですね。

例えば企業の不祥事などに関して、ある企業がコンプライアンスのルール違反しているとしても、就職先を選ぶ観点として、その企業に関してなんら疑問ももたない。授業でやっていたとしても、目の前の学生はつながっていない。これはいったい何なのだろうということをいつも、常に疑問に、出口部署としては思うのです。

経済学的アプローチ、法学的アプローチ、理学的アプローチ等々ありますが、そこを通過して学び鍛えられているはずの学生が、なぜ今、世の中で起こっていることとつながらないのだろうか、だから、社会に出てもやはりつながらないのだろうと。この点は、先ほど井上教授が、私たちの部署は社会との接点に位置していると言われましたが、それだけに本当に歯がゆいです。大学は現実の課題を解決するために学生を世に輩出するわけではなく、さらに企業に合わせた人材を輩出するのではまったくないのですが、だからといって、キャリア教育を単に展開すればよいというようなことではなく、生きた学問というか、立教の建学の精神を踏まえてみると、今、まさに必要とされる社会をよくしていく人材を立教大学は輩出できると思っているので、やはり出口で学生たちを見ていると、とてももったいないと思うのです。もう少し鍛えれば、絶対に立教の学生は社会を変えてみせます。この確信と学生に対する信頼がまさに出口の部署の根源的な存在意義なのですということを、どうしても言いたくなりました。

○司会　どうもありがとうございました。大変有意義なシンポジウムだったと思います。小さいものと大きなものをつなぐもの、観念と現実をつなぐものが、まさに「教養」というものではないか。そういう意味で、まさに今日の３回のプレゼンの核心を突くご質問をいただいたと思っております。

これでシンポジウムは終了させていただきます。本日は本当にありがとうございました。